

2020 離島覚書（長崎県・宇久島）



中央の山が城ヶ岳

令和3年11月18日

寺島から戻り、港の前の行政センターに伺う。住民基本台帳上の字別人口と世帯数のデータをもらう。管内図を500円で購入。農業と水産業で現状を聴取。

6月1日現在の農家戸数は73戸。肉牛の飼養頭数は1,189頭。年間の子牛の出荷頭数は約1,000頭、平均販売額は70万円ほどなので、畜産の生産額は7億円ほどで、漁業を大きく上回る。牛の繁殖以外にはめだったものはなく、甘藷やブロッコリーが少々といったところ。島内を見て回っても、畑作はほとんど見られなかった。

漁協の組合員数は正が40人、准が135人の合計175人（2021年3月末時点）地区別の内訳は次の通り。

小浜：1、19、20、神浦郷：1、19、20、神浦町東：0、4、4、神浦町西：0、6、6、神浦寿久居：4、7、11、飯良：1、13、14、太田江：1、1、2、木場：1、1、2、向江：6、6、12、佐賀里：4、5、9、船倉倉：1、6、7、川端：1、4、5、松原：5、7、12、旦ノ上：0、3、3、堀河：4、6、10（これまで平）、寺島：0、3、3、野方：7、2、9、大久保：0、7、7

営まれている漁業種類は刺網、ヨコワ曳釣り、一本釣り、延縄、採貝、採藻、タチウオ漕ぎ、狐疑 総額1.3億円。

島内の漁港は、神浦②、野方①、小浜①、寺島①、古里①、木場①、平港

行政センターから小学校脇の公民館に行き、図書室で郷土資料を閲覧。

宇久町郷土誌編纂委員会（2003）：宇久町郷土誌、宇久町役場・宇久町教育委員会。

香月洋一郎（2009）：海士のむらの夏—素潜り漁の民俗誌—、雄山閣。290pp. 宇久の海士の記録。

昼食後顔を出し、コピーを依頼するが、本は 2,000 円で販売しているとのことなので、1冊購入した。引き続き漁協に顔出す。人手不足のようで、荷捌き場で仕事をしていた。かなり忙しそうなので、簡単に話を聞く。

ワカメは低い水温を好むが最近はや育たなくなった。ヒジキも採れない。海藻はテングサぐらいしかとれない。トサカノリは個人的に獲っている人がいる。採貝はサザエが中心で年間 1 トンほど。昔の 1 人のひとの 1 日分を 1 年間で獲るかんじ。釣りはイサキがメインだが、最近はや不漁が続いている。漁獲物は佐世保に運び、県漁連が関西方面に出荷している。地元には買受業者はいない。延縄はレンコダイやアマダイを獲る。太刀魚漕ぎは針にワームを巻き、そこに餌をつける。鉛の錘をつけたくさんの針を流して釣る。針は 30 本、鉛の分銅は 2 ～ 3 kg。水深 100m 付近を曳く。白銀としてブランド化。ヨコワ釣りは冬から春にかけて。

漁協のヒアリングを終えてから、島を一周する。

スゲ浜海水浴場。台風で破損。近くに牛舎あり。15 頭ほど飼養。

長崎鼻遺跡、広い牧場が続く。先端に長崎鼻灯台。

海岸は溶岩の流れた跡のよう。海には海藻は全く見られず。透明度が高く沖縄のうみのようなかんじ。途中、斜路がつくられていて、ボートが 2 隻置かれていた。大浜海水浴場。遺跡の発掘現場、道路を挟んで隣の畑にはトラクターで耕耘、160 号線にでる。

野方の集落、田あり。野焼き。手前に荒れた田あり、耕作放棄。野方草原、灯台あり。付近の磯には釣り客が多い。

三浦神社の大ソテツ。15:06. 三浦湾には防波堤あり。漁船 5 ～ 6 隻。

城ヶ岳展望台、小値賀島を一望できる。15:48 下る。

牛舎比較的大きい、木場漁港。

本飯良。八幡神社。川に蚩。

16:18 古里漁港 キジハタを釣ってきた人。生家は八幡神社の隣。タグボートの仕事を大阪から鹿児島にかけて。休暇の時は帰省して釣りを楽しむ。古賀勇吉さんという。宮本常一が好きとのこと。これから夜釣りに出かけ、水イカ釣りに行くとのこと、年に 4 回休暇がある。お父さんの供養で、火焚崎に金をつくったので、叩いて行ってくれと頼まれた。

曳釣りで、ヒラマサやブリ、延縄は神浦がさかんだった。延縄はアマダイ、レンコダイが対象。今は数人しか残っていないだろう。35 年前はアワビ獲り、イカ釣り、ブリ、ヒラマサの曳釣りがさかんであった。神浦には豊島の家船もやってきたことがある。

古賀さんが 18 歳の時、宇久島の人口は 7,000 人いた。今は 2,000 人を切っている。釣りはケンサキイカが中心。漁船は 4 隻、マグロとイカ兼業が 1 隻、コウイカ釣りの船が 3 隻(竿は竹製)、曳釣りの船が 3 隻

隣に 3 隻いたので合計 10 隻の漁船

厄神社、平家盛の上陸地、平原ゴルフ場、以前来た時にあった風力発電の風車が撤去されていた。160 号にでて、平に向かう。17 時頃、藤屋旅館に入る。

令和 3 年 11 月 19 日

7 時過ぎに藤屋旅館で朝食。7 月 30 分過ぎに宇久小値賀漁協の宇久支所へ。ちょうど運搬船が浮棧橋に係留され、出荷の準備をしているところだった。活魚が最初に積み込まれ、

続いてトロ箱に入れられた鮮魚類はパレットに2個口、積み込まれた。運搬船は小値賀島まで行き、本所の荷物と一緒に佐世保に向かう。今日のように荷が少ない場合は運搬船は宇久島に戻る。荷が多い場合は直接佐世保に持っていくことになり、2隻で運搬することになる。

水イカは夜釣りだったため、朝集荷されたが、その他の魚は前日集荷されたものである。ヒラス、レンコダイ、水イカ、タチウオ、ホウボウ、アコウなどの記述が見られた。

運搬船には漁協の担当者が乗り込み、8時少し前に出発した。

続いて神島神社に行く。神社の鳥居は大正10年4月につくられたもの。

平家の7代が祀られているという東光寺へ。境内には「鯨魂供養塔」が置かれていた。昭和17年につくられたものだ。宇久氏の墓は見あたらなかった。隣に幼稚園あり。

宇久島郷土資料館の隣に武家屋敷（五島藩代官所跡）がある。石垣が積まれ、直角に曲がる。続いて久保様の墓、平家が上陸した時に地元で反対し処刑された一族の墓。毘沙門寺、宇久高校を見る。

9時に宇久教師資料館を開けてもらうことになっていたのので、公民館の若い職員が9時ちょうどにやってきた。案内は観光協会の人ができるということで、5分ほど待つと観光協会の人が出てきて、鍵をあげてくれた。館内には島内で発掘された遺跡の出土品と生活民具が展示されている。現在も発掘作業が行われていて、宇久島は大陸との交流があった関係で多くの出土品でこれからも出てくるようだ。

続いて国道160号をドライブ。国道は宇久島を一周している。昨日通らなかったコースを走る。野方の集落から南下し太田江を経て、平に戻り、フィッシャリーナに行く。フィッシャリーナにはヨットはなく、プレジャーボート2隻、船外機2隻しか係留されておらず、がら空きの状態であった。国費を投入して哀れな姿だ。

続いて小浜の蒲浦漁港へ。漁港の前面に巨大な防波堤。漁船8隻。トローリング用の竿を装備している。うち2隻はイカ釣りもできるように集魚灯がぶら下がっていた。漁港の背後に小浜・蒲浦の集落が形成されているが、空き家が目立つ。漁港前の家は撤去されて更地になっていた。漁港を見下ろす高台に集落の墓あり。

下山漁港、アコウの大木。漁船8隻、何れも小さい。他にプレジャーボートが1隻置かれていた。背後にやはり集落が形成され、漁港の脇に金刀毘羅神社があった。昭和13年につくられた鳥居。一番先に係留している漁師に話を聞いた。77歳で、これまでに脳こうそくを5回やっていて、機関の直し方がよくわからないという。半農半漁だったが、漁師專業になったのは40歳代になってからのこと。以前は大きな漁船をもち、ヨコワ釣り、水イカ釣り、ヒラマサの引きづり、ケンサキイカ釣り、クエ延縄など何でもやったという。曳釣りの餌は魚探で反応のあるところにサビキをおろしてアジやイワシを釣り、これを活餌にしてブリやヒラマサを釣ったそうだ。船を小さくしてからはヨコワ釣りはしていない。

もともとこの集落は半農半漁で暮らしていたが、農業では食べていけなくなり、漁業に專業化したようだが、その漁業も資源が減り、厳しい状態が続いているという。回遊魚は上の方に移動しているとのことで、福岡方面に釣りに行く人が多いという。海藻はなくなり沖縄の海のようになっているという。アカハタが釣れるようになったが、今年は減っており、上の方で釣れているらしい。そのうち1隻の漁船が戻ってきた。

神浦に向かう。妙覚寺、旧神浦小学校跡をみる。宇久島神社。神浦の神社で大きい。ここ

は狛犬ではなく、牛だった。神浦漁港に下る。漁港の脇に、巖島神社と金刀毘羅神社が並んで置かれていたが、規模は宇久島神社に比べると小さく、しかも管理は不十分であった。

神浦から北上する。神浦中学校跡を見て、北上し大久保地区にでる。国道に交わる手前に大きな牧場があった。大久保集落には鹿神社。こちらは狛犬ではなく鹿。神社の脇に集落の公民館あり。海に下り、木場放牧場を見る。国道に戻り、浄土宗巖浄寺をのぞく。背後に墓地。城ヶ岳に行く道を南下し、貯水池。その脇にオリーブの農園あり。木は幼木。さらに下げると、オリーブ振興協議会の事務局のある建物。その脇にオリーブが植えられていた。こちらはかなり大きくなっており、実が収穫できそうだ。そこから総合運動後編へ。陸上競技場と野球場が整備されていた。平に戻り、少し時間があつたので再び北上し、細い道を南下する。ミカンの果樹園あり。

サインペンを購入。ガソリンを給油。港の前の「あかちょうちん」で昼食にちゃんぽんを食べる。13時50分発の「太古」で福岡港に向かう。自衛隊員が多数乗り込んでいた。腰が痛いため、座敷で寝るのはやめる。